幸福（しあわせ）（1964）

LE BONHEUR
HAPPINESS

メディア	映画
ジャンル	ドラマ
製作国	フランス
色彩	Color
時間	80分
初公開日	1966/06/04
公開情報	ヘラルド
リバイバル	1973/01［ヘラルド］

【キャッチコピー】
その歓びは、ひまわりの花びら　その哀しみは、頬に散る枯葉　しあわせとは語らず感じるもの……
鮮やかな色彩とモーツァルトの旋律に甦る女流監督バルダしあわせの四季

【解説】
　大輪のひまわりと、その畑を往く夫婦に二人の幼な子のぼんやりした人影が交錯する印象的なタイトルが終ると、モーツァルトの明るい調べに乗ってピクニックに興ずる親子の姿が写し出され、誰もが題名の“幸福”をそこに実感する。舞台が彼ら夫婦の叔母の家に転ずると、ピクニックから戻った夫婦が何気なく目にするのは、ブラウン管の中の映画「草の上の昼食」。本作自体が巨匠ルノワールの名作「ピクニック」のオマージュであるが、そんなさり気ない形でも巨匠に敬意を表することを忘れぬヴァルダだ。いわゆる〈シネマ・ヴェリテ〉的手法を駆使しながらも、より伝統的な形態を取った本作の主張はシンプルに見えて相当複雑だ。叔父の建具屋で働く夫フランソワは洋裁で家計を助ける美しく従順な妻テレーズと子供たちを全身全霊で愛しながらも、出張で度々出る近くの町の郵便局員エミリーも愛してしまう。彼女は“自由な女”であり、フランソワに不倫の罪悪感を感じさせない。正直な彼はある日のピクニックで妻にありのままの事実を伝えた。妻と愛人をリンゴの樹に喩えて、その花のいずれも美しいと思うことを……。テレーズは、彼が幸福であるなら、それも受け入れようと言い、二人、裸で草の上愛し合う。が、うたた寝から覚めると、妻の姿はなかった。子供たちの手を引き、池の方に出ると、あがったばかりの彼女の溺死体。テレーズはそこに身を投げたのだった。沈痛な日々を送るフランソワは再びエミリーを訪ね、交際を再開する。他人の不幸の後に居坐りたくはない――と言う彼女だが、自然に子供たちを受け入れ、家族の一員となっていた。季節は既に秋深く……。印象派の絵画そのものの柔らかな映像で、優しく平凡な人間の営みに心を寄せながら、その洞察の向こうに見透けるものは意外にラディカルなのだ。

【クレジット】

監督	アニエス・ヴァルダ	Agnes Varda
製作	マグ・ボダール	Mag Bodard
脚本	アニエス・ヴァルダ	Agnes Varda
撮影	ジャン・ラビエ	Jean Rabier
	クロード・ボーゾレーユ	Claude Beausoleil
音楽	ジャン＝ミシェル・デュファイ	Jean-Michel Defaye
出演	ジャン＝クロード・ドルオ	Jean-Claude Drouot
	クレール・ドルオ	Claire Drouot
	マリー＝フランス・ボワイエ	Marie-France Boyer

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。　Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.